

審査員特別賞

「ファーザー・コンプレックス」

経営学科 4年 川崎 太雅

夢を諦めた私には、夢を追いかけていた頃の私の怒声が聞こえる。
「なんで諦めた。お前も父ちゃんと一緒やないか。情けないぞ」

私が小学生の頃、父はよくスケッチブックに絵を描いていた。
何を描いていたかは覚えていないが、父との会話は覚えている。
「そんなに絵描くのが好きやったら、絵描く仕事したら」
「そうやな。俺も絵描く仕事したかったわ」
「なんでやらなかったん？」
「大人になれば分かるよ」
笑いながら答える父を、私は情けないと思った。
大人になり、夢を諦め趣味として絵を描く父を情けないと思った。

程なくして、父は私の前から消えた。

数カ月後、私は小学校の卒業式で舞台に立ち、自分の将来の夢を叫んだ。
こんなものはただの慣例で、大人たちは誰も本気にはしなかっただろう。
しかし私は父に対しての誓いとして、その場にいる夢を諦めた大人たちへの誓いとして、本気で自分の夢を叫んだ。
俺は夢を諦めない。お前らみたいな大人にはならない。

そして、私は大学四年生になった。
実家に住む母は精神疾患を患い無気力な生活を送っており、母と同居する祖母は認知症を発症。祖父が一人で介護をしている。
私は祖父の勧めで現在は一人暮らしをしているが、齢八十を越えた祖父の負担を考え実家に近く介護がしやすい職場に就職を決めた。

ある日、実家に帰省し引越しに向けて自室の掃除をしていると押入れから父のスケッチブックが出てきた。
元は父の部屋だったので、未だに父のものが残っているのだ。
一体何が描かれているのか。私は少し躊躇いながら父の残したスケッチブックを開く。一枚。また一枚。
何枚捲ってもそこには幼い私や母、飼っていた猫のデッサンしか描かれていなかった。

単に自宅にモデルが少なかっただけか、何も考えずにふと描いただけかもしれない。
しかし私にはそれが、父が夢を諦めた理由にしか見えなかった。
私は気づいた。思えば私自身も、家族のために夢を諦め定職に就こうとしている。

「大人になれば分かるよ」

父の言葉が脳裏をよぎった。
もう私は父を情けないとは思わない。

私も自分に子ができて夢を諦めた理由を聞かれたら同じ回答をするだろう。
ただ、私のように夢を諦めて欲しくはない。
父もそう思ったはずだ。
大人になって分かった。

十二歳の少年の声は、もう聞こえない。